Cross Interview

心身を支える、運動の魅力。

気仙沼の気になる人を紹介するコーナー。
市内で運動・スポーツの推進に取り組むお二人に、思いを伺いました。

①活動には多世代が集まります

②東北初のトランポリンパーク

③中学生バスケ交流試合

佐藤 慶治 さん

対談

藤田 一平 さん

●活動をはじめたきっかけ

佐藤：震災後の町の変化が大きかったです。私自身、幼少期から地域で交流できるスポーツの場に多く接していて、震災で遊び場や人が集う機会が減るなか、自分もスポーツを通じて何かしたい思いが芽生えました。大学生の頃にスポーツ人口世界一、世界幸福度ランキングトップクラスのフィンランドへ留学機会を頂き感じたのは、身近にスポーツの選択肢が多くあり、各々が自分のライフスタイルに合わせ、生活の一部としてスポーツを取り入れていることです。この経験から誰もが、いつでもどこでも運動ができる環境を地元でも作りたい！との思いが募り、大学卒業後、南三陸町にUターンしすぐにスポーツサークル「あくてぃぶ！」を立ち上げました（①）。レクリエーションや遊びに近い場づくりを続け、今年で５年目です。昨年のぬま大学参加をきっかけに、気仙沼市でも活動を始めました。

藤田：私は震災後、市内に子どもたちの遊び場が無くなったことに危機感を感じ、自社の"高さのある倉庫"を活かして何かできないかと、さまざまな検討を重ね、トランポリンに巡り合います。子どもの身体づくりを支えるトランポリンと、水産業を下支えしてきた自社。"支える"という言葉が最後の一押しとなり、一昨年 12 月にトランポリンパーク「F-BOX（エフ ボックス）」を市内に開業しました（②）。

佐藤：当時は気仙沼にトランポリン !? と衝撃を受けました。新しい挑戦を始める人が身近にいて、自分も頑張るぞ！と火をつけられました。

藤田：そう言ってもらえると背筋が伸びる思いがしますね。また、趣味で７年前からバスケサークルを主宰しています。新型コロナの影響で今年のバスケ中総体中止を知り、「練習を重ねてきた中学３年生に最後の舞台を用意したい！一市民がやるしかない」と、地元有志の仲間たちと一緒に、８月下旬、バスケの交流試合を開催しました（③）。親の承諾書、検温など、感染症対策には細心の注意を払い、当日は 55 人が参加してくれました。たまに、市内を飲み歩く若い子から「どごさもいぐどこねぇ」といった声を聞きますが、運動したらいいのにと思います（笑）気仙沼は何もない、何かあればいいのにと自分が感じたとしたら、誰かがやるのを待つのではなく"自分がやる"という姿勢や気持ちが大事だと思い行動しています。

Profile ／ 1993 年福島県相馬市生まれ。南三陸町育ち。（一社）little FLAG（リトル フラッグ）代表。2016 年に仙台から南三陸へ U ターン。市主催「ぬま大学」第５期生。生活の質向上を目的とする生涯スポーツの普及・推進に取り組む。

●新型コロナ下の活動状況

藤田：施設として一番大事なのは"安心安全"です。感染拡大地域からの来場者の制限をするなど、９月現在も感染症対策はすべて行っています。大手を振って遊びに来てくださいと呼びかけにくい状況下ですが、地域の父母から「長く家に居ることでストレスが溜まり子どもが乱暴になった」などの相談を受けることがあります。運動不足は心身ともに影響が出ることを改めて実感しています。

佐藤：私も検温や人数制限、消毒等の対策を徹底しつつ、６月から徐々に活動を再開しています。「体を全然動かせてなかった。やっぱり集まってやる運動はいいね！」今の状況下だからこそ、"スポーツの現場は尊いもの"という参加メンバー共通の価値観が生まれました。

●新型コロナ下でできること

藤田：スポーツ団体同士のヨコの繋がり強化を目的に「気仙沼スポーツツーリズム※プロジェクト」が昨年立ち上がり、関連団体が垣根を越えて繋がりつつあります。未来を見据え、足場を固めるには良い時期ではないでしょうか。

佐藤：確かにスポーツのジャンルが違うと、互いの接点を持つ機会がないですよね。繋がりによって違った価値観が交わることで新たな取り組みが生まれそうですね！

●運動の魅力と今後の取り組み

佐藤：運動するとぐっすり眠れる、頭がスッキリして気持ちが前向きになる、ビールが美味い（笑）など、良い所づくしです。さまざまな選択肢を提示することで「このスポーツなら私もできるかも！」と多くの人に参加してもらい、その達成感・楽しさ・幸福感を感じてもらいたいです。これからも、参加者が満足するスポーツの場づくりを、探求しながら続けていきたいです。

藤田：トランポリンで遊びながら体得できる空中感覚は、さまざまなスポーツに活かすことができるので、子どもたちの未来の可能性を広げてもらいたいと思っています。人は、嬉しくても悲しくても涙は出ますが、ジャンプは楽しい時や嬉しい時にしかしません。老若男女（ろうにゃくなんにょ）問わずに心身ともに健康になれる、心からおススメできる運動です。スポーツをきっかけに、今まで関心がなかった人が気仙沼に訪れるようになり、気仙沼を好きになってもらえる機会が増えていくことをとても嬉しく思います。
今後も地域の皆さんと協力しながら、共に楽しい未来の気仙沼を創っていきたいですね。

Profile ／ 1986 年気仙沼市生まれ。（有）藤田製函店専務取締役。2011 年１月に U ターン。2018 年 12 月に地域資源を活かし、室内で遊べる東北初トランポリンパーク「F-BOX（エフ ボックス）」を開業。市主催「気仙沼経営人材育成塾」第２生。

※スポーツツーリズム：スポーツと多種多様な地域の観光資源を融合し、新しい旅行の魅力をつくり出す仕組み。

1991 年生まれ。鹿折出身。理学療法士。気仙沼高等学校を卒業後、専門学校在学中に震災が発生。故郷に戻ることを決意。気仙沼市から、全国に情報を発信する「ストレッチ系ユーチューバー」として活躍する。

気仙沼出身ユーチューバー

尾形 竜之介 さん

おがた　りゅうのすけ

―体が硬くて困っている人をゼロに

「紙の説明書を渡しても、読まずに捨てる子どもたち。動画にしてそれを説明したら、喜んで見てくれました。」

専門学校を卒業後、市に U ターンした尾形さんは、気仙沼市立病院に勤務し、約６年間患者のリハビリテーションなどを指導します。働くなかで、大船渡市などの遠方から通院される方の姿を見て、「体の悩みを解決できる手段が、もっと身近にあったらより良いのに ...」との想いが募ります。

オンライン上なら、どこからでも情報を届けられることから、2019 年に転職し、兼業でユーチューブの動画配信を始めます。「当時が一番つらかった」と尾形さん。夜に帰宅後、深夜から朝方にかけての動画制作・配信を毎日欠かさず続けました。活動の励みになったのは、長年の腰痛が解消したなどの視聴者の生の声だったと言います。

その後も質の高い情報発信を続け、今年５月にはストレッチ系ジャンルで日本一のユーチューブチャンネル登録数（50 万人超）になりました。

―気仙沼から発信する意義がある

「動画内で、壁に『おっかかる』と言ってしまったことがあります。『寄りかかる』が正しい、と視聴者からコメント頂きました（笑）自然な気仙沼弁は、逆に親しみやすさなど、自身の強みになっているかもしれません」と振り返る尾形さん。気仙沼に住み、気仙沼を拠点とした発信活動をこれからも続けていきたいと意気込みます。

―小さな悩みにも寄り添っていきたい

「腰痛や肩こりなど、現代人の多くが抱える悩みに向けた内容だけではなく、数は少なくても本当に悩んでいる人に向けたコンテンツを作るなど、視聴者に寄り添った配信を心掛けたい。また、動画は解決手段のひとつなので、時代に応じて、変化するもの・しないものを意識し、新たな挑戦にも果敢に取り組んでいきたい」と力を込めました。

体の不調を感じる多くの人のお手伝いがしたいとの想いから、体が硬い人向けのストレッチに関する著書を７月末に出版し、市内の全小・中学校、図書館に寄贈されました。

「オガトレ」
ユーチューブチャンネル登録者 58 万人・月間再生回数 700 万回超（9月時点）。QR コードから閲覧できます。